消費社会と音楽―クラシック文化の成立と大衆化

桐朋学園大学教授

西原 稔

クラシックとポピュラーは二つの文化か?

音楽はすでに中世から二つの側面をもっていた。それは保存される音楽と消費される音楽である。その前者の保存される音楽の筆頭にあげられるのは教会での音楽である。これは、決して恣意的に変更や加筆を加えてはならない音楽である。そして後者の消費される音楽される音楽である。そして後者の消費される音楽は、古くは世俗音楽と呼ばれた音楽である。この構図は、現在も変わらない。保存される音楽はクラシックで、消費される音楽がポピュラーである。

(クラシック音楽)と消費音楽(ポピュラー化が隆盛になった時代では、この保存音楽「ビーダーマイヤー文化」と称される市民文しかし、19世紀のウィーン会議以降の、

田家)は、ルネサンスやバロック時代の音楽の復活という要素に加えて、中産階級の職業の復活という要素に加えて、中産階級の職業いて、この二つの音楽の区分は多様になっていった。さらに20世紀になると、マス・メディアの普及と連動して、クラシックのポピュラー化、ポピュラー音楽のクラシック時代の音楽いう現象が生まれた。

シックの音楽に対する意識が大きく変化し始まっが、音楽愛好家の消費動向、つまり人々すのが、音楽愛好家の消費動向、つまり人々なではなど、これらすべては市民の消費意欲と支出など、これらすべては市民の消費意欲と要需に結びついているのである。20世紀後半、とくに1970年代以降この消費意欲ととくに1970年代以降この消費意欲とクラ

めている。

団の経営危機の問題である。ているのが、昨今、話題になっている交響楽危機の様相を呈している。それを端的に示し日本のクラシック音楽は、さまざまな意味でしかし、ヨーロッパとは文化伝統の異なる

そもそも「クラシック」とは何を意味しているのであろうか。この語が今日の意味で用いるのであろうか。この語が今日の意味で用いられるようになった確かな時期は明らかではないが、市民社会の成立と密接な結びつきをもっていることは間違いない。元来「クラシスclassis」という語は、古代ローマ時代では有産階級の市民を意味していた。その後19世紀社会では、この語は富裕な市民階層やその芸術趣味と同義に用いられ、彼らの愛好する音楽には「クラシック」とは何を意味してというレッテルが貼られるようになったのである。

この「古典的」というレッテルの背景は複雑である。というのはとくに建築の分野において、1820年代以降、古代ギリシャ、ロいて、1820年代以降、古代ギリシャ、ローマ時代の様式を模した擬古典様式の建築が大流行し、歴史への回顧が積極的に行われ、複古思潮が尊重された。パリやロンドン、ド復古思潮が尊重された。パリやロンドン、ド東主義の建造物が数多く建築されたのであ典主義の建造物が数多く建築されたのである。(写真1)

▲写真 1 1842年完成のヴァルハラ神殿 (ドイツのレーゲンスブルクのドナウ川沿いに建設)

り、 え、 唱作品を愛好し、 化に貢献したのも彼らである。 のである。 て公序良俗を遵守し、 古典的なスタンダード・ナンバーの定着 ベートー 彼らがルネサンスやバロック時代の合 バッハを再評価したのは彼らであ ヴェンをプログラムの中心に据 演奏会の定期会員となった 政治的には保守的であ

中産階級が台頭すると、新たに富みを得た彼

|世紀中葉以降の近代社会において富裕

が音楽の主たる担い手となる。

市民社会の

や時代思潮と密接に結びついていた。

19

した復古的な音楽や文化を支持する社会階層 に音楽のジャンルを指すだけではなく、

0

、レストリ つまり、

クラシックという概念は、 ナが再評価されるようにな

そう

その流れの中でバッハが復活し、

ルネサ

主役である彼らは、

貴族的な生活を理想とし

IJ 71年までのパリ音楽院演奏協会の演奏レパ 階級であるが、 全体の66%を占め、ドイツ音楽が95%に達し トリーでは、 ロンドン、 ラシック音楽の確立に貢献したのは 交響曲ではベートーヴェンが ウィーンの中産階級及び上流 たとえば1828年から18 パ

まり、 クの演奏会のレパートリーは19世紀中葉に定 わらない。 唱団員の家庭にまずピアノが普及した。 ック時代の宗教作品をレパートリーとする ウィーンでも同様である。 この傾向はパリほどではないが、 その内容は基本的に現在に至るまで変 こうした交響楽団の定期会員やバ つまりクラシッ ロンドン

となったのは19世紀に入ってからである。 緊栄の指標としてのピアノ ピアノを持つことが「文化」のいわば指標

時代前のチェンバロは王侯貴族と富裕階層の

級は、 級のたしなみである「音楽」を、 らがより廉価なピアノの製造を始めて以降 からロンドンに渡ったピアノ製作者のツンペ とくにイギリスのブロードウッド 楽器であり、所有者も限られていた。 重要な指標がピアノであった。 して享受するようにある。その時のも 富裕な中産階級にピアノが浸透するようにな ング・ルームを設けるだけではなく、 ビジネスによって富を得た富裕な中産階 大きな邸宅を構え、素晴らしいリヴ (写真2) 教養の印 や しかし、 貴族階 ドイツ 1



▲写真2 父親がヴァイオリン、 息子が がピアノを演奏し、母親は左の奥で編み物をしている。 ツヴィラー画(1849年)



写真3 サロンでピアノを演奏する女性 ロバート・ナドラー画(1869年)

能で、現在の日本の感覚でいれば外車の値段ば、中間役職の公務員のほぼ年収分で購入可は、中間役職の公務員のほぼ年収分で購入可事。

ある。つまり、19世紀から20世紀にかけて、の人々もピアノに対して熱い視線を注ぐのでさらにそうした富裕層を目指すその下の階層波及効果は絶大である。瞬く間に同様の所得とアノを所有する家庭が登場すると、そのの感覚であった。

なったのである。ピアノは富の蓄積と富裕階層の一つの記号と

は、 は、 は、 である。というのは、19世紀から20世紀にかいるように、ピアノは事実上、富裕階層の女性の趣けて、ピアノは事実上、富裕階層の女性の趣けて、ピアノは事実上、富裕階層の女性の趣味の道具となり、音楽学校のピアノ科の在校味の道具となり、音楽学校のピアノ科の在校味の道具となり、音楽学校のピアノ科の在校中の過半が女性で占められるようになるからである。しかも、女性の演奏するレパートリーや指導内容は、とくにドイツでは細かく規ーや指導内容は、とくにドイツでは細かく規ーや指導内容は、とくにドイツでは細かく規ーや指導内容は、とくにドイツでは細かく規ーや指導内容は、とくにドイツでは細かく規ーや指導内容は、とくにドイツでは細かく規ーや指導内容は、とくにドイツでは細かく規ーや指導内容は、とくにドイツでは細かく規ーである。しから、

ŋ る、 し絵でもあった。しかし、バブルが弾け、 象徴であり、家長である父親の出世の証であ 出来ることは、親の夢であり、 和50年代までの日本の社会の目標でもあっ 育としてのピアノは、とくに大正時代から昭 の作曲した「乙女の祈り」である。 た。ピアノを持ち、ピアノを習わせることが その代表が、 立派な邸宅とリヴィング・ルーム、女子教 バダジェウフスカという女性ピアニスト 高度成長を成し遂げる日本国の経済の写 19世紀のミリオンセラーであ 家族の繁栄の (写真3) 高

> ストの大きな変質を示している。 で戦後の日本の近代化と復興というコンテク離れが始まっている。これは明治以来、そし度成長経済が一転した日本では急速にピアノ

「文化」とクラシック

会館」 語が、 れるキー・ワードであったのである。 クラシック音楽は「豊かさ」を約束されてく 何と言っても「豊かさ」であった。 っていた。それは高度成長と家族の繁栄と、 30年代から40年代にかけての時代におい 戦後では「文化包丁」や「文化住宅」という 語と化しているかもしれない。第二次世界大 「文化」という語は、あるリアリティーを持 「文化」という言葉は、 の思想が全国を駆け巡った。この昭 庶民の近未来の反映を象徴し、 現在はほとんど死 つまり、 「文化

になった時点で、クラシック音楽 = 社会の 対き渡り、郊外に一戸建ての住まいを求め、 行き渡り、郊外に一戸建ての住まいを求め、 でき渡り、郊外に一戸建ての住まいを求め、 がきがいたのである。社会の富がある程度、 としていったのである。社会の富がある程度、 とい、ピアノを持つことが「誇り」とする指 標も実態を失う。

高度成長期にピアノが売れたのはまさに、

く変質してきた。「文化」の指標が特に2000年以降、大きある。その指標が特に2000年以降、大き「文化」の指標としてのお稽古教育の反映で一戸建ての住宅環境の整備と子供に対する、

その変質は、ピアノの販売台数の激減に明瞭に見て取ることが出来る。それでは人々はピアノに代わる、何を文化の指標としてきているのであろうか。パソコンなのであろうか、高性能のテレビなのであろうか。これらの商高性能のテレビなのであろうか。これらの商品はすでに指標としての機能を終えている。今日の日本は「文化」という語だけではなく、文化指標すら喪失してきているのではないだろうか。

クラシックは今

連続演奏会であった。
アルトのCD全集と、マーラーの全交響曲のは、バブルの絶頂期にリリースされたモーツは、バブルの絶頂期にリリースされたモーツ

1991年、日本はモーツァルト死後20 の年記念事業に大いに沸いた。マンガの解説 によるモーツァルトCD選集も発売され、そ の前哨ともいえるマーラー・ブームは、日本 中でマーラー新時代ともいえる熱狂を巻き起

^夕文化は大きな節目を迎える。 バブルが崩しかし、この時期を境にして日本のクラシ

け、ひたすら実利の確保と実用性を人々は目文化という実体性のない浮遊価値に背を向会は極端な現実路線に向かい、クラシックや壊し、夢の文化の風船がはじけた後、日本社

指すようになる。

かつては好調な輸出にも支えられて、日本のピアノ創造台数はヤマハおよびカワイなどのメーカーを合わせて、1980年(昭和55万台弱に落ち込み、現在は韓国や中国でのピアノ製造が急増していることも影響して、国内のピアノ製造台数はさらに低下している。そして、クラシックのCDの売り上げも激減そして、クラシック愛好者が減少しているのつまり、クラシック愛好者が減少しているのである。

そしてロマン派のショパンやリストの時代は、聴衆は彼らの新しい音楽に期待した。どは、聴衆は彼らの新しい音楽に期待した。どは、聴衆は彼らの新しい音楽に期待した。どのような真作が発表されるかを人々は固唾をのような真作が発表されるかを人々は固唾をていたであろう。20世紀初期においてもドビていたであろう。20世紀初期においてもドビーでいたであろう。20世紀初期においてもドビーでいたであろう。20世紀初期においてもドビーでいたであろう。20世紀初期においてもドビーでは、聴衆が賛否を巡って大騒ぎをするほどの活気があった。

だが、現在はどうだろうか。現代音楽の新

作の演奏会はまったくスキャンダルにもならなければ、大騒動も起こさない。聴衆は誰も現代音楽には期待していないと言った方が良いかもしれない。演奏会やCDなどで演奏されるのは、バッハの時代の約200年間の音楽で、特定の作曲家の特定のレパートリーが楽で、特定の作曲家の特定のレパートリーがかな演奏者を発掘してCDがリリースされてかな演奏者を発掘してCDがらせいざいるが、その制作点数は年々、減少の一途である。

て聞かれる日も近いのかもしれない。
を繋が話題となって、繰り返し演奏され、毎年膨大な数の楽譜が出版された当時とは明らかに異なり、音楽享受のレパートリーとなるかに異なり、音楽享受のレパートリーとなるかに異なり、音楽する出版された当時とは明らなが、文化財あるいは古典芸能としず、イートーヴェンの時代のように新作の現代で聞かれる日も近いのかもしれない。